
坂本

大暮空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

坂本

【Zコード】

Z97860

【作者名】

大暮空

【あらすじ】

ひよんな事からクラスメイトである坂本月に“殺人に興味がない？”という言葉を聞かされた小嶺文哉は、日常に一つの変化が訪れた。学校一の完璧な先輩。食べる事に好意を抱く孤独人。死を蒐集する自殺志願者……。好奇心に身を任せた月と、借りに忠実な文哉の瞳には、日常に非日常が溶け込んだ世界が映っていた。

口常（前書き）

初投稿です。

読んだ感想等をよろしくお願いします。
辛口なものでも受け付ける限りです。

幾分の星たちが密会するある日の夜。

俺は彼女に壊され、

彼女は俺に殺された。

1・日常変化

000

坂本月、つまりは俺の友達以上恋人未満の彼女の物語を欲するような層は、そもそもいないのだと思われるのだが。しかしどうして。いくら需要がないからって言つてもこの物語の真相を知りたいと言う人間は、そもそも、指の数程度しかいないだろうと言うのにも関わらず、それでいて、その真相を知りたいという願望があるというのもまた事実なわけである。

俺としては、それはもの凄く迷惑極まりない爆弾テロ並みの悪意

を感じるのだけれど、それでもこの事実は既に肯定されてしまつて
いるのだ。

だからだ。

だから教えてやつてもいい。

いやいや、教えてやひひじやないかと俺は思つ。それで、気が晴
れると言ひのなら。

願望が叶うなら、

欲を手に入れられるなら、

そのためにだつたら俺はこくらでも力をかそつ。

この手、

この足、

この胴体、

この臓器、

この命を賭けてでも。

でも。しかしながら、それはあくまでそれだけであつて、こ
の話は全くの例外。

この物語に關しては、俺は断固してそれを拒否するだらう。拒絶
するだらう。これは、それほどまでに危険性を帯びているのだ。
これもまた事実。

けれども、

俺はこの物語を語らなければならぬ。
語らなければいけない使命があるのだ。

いくら俺が、これに對して逃走を試みたところだ、まるで、鎖に
よつて体を拘束されたかのように一つの楔によつて逃げることなど
万に一つないに等しいわけである。

それが、彼女と交わした最後の約束なのだから。

10月10日　俺は自殺した。
いや。自殺したのではなく、自殺しようとした、だ。
自殺未遂、
自殺に最も近くて、もっとも遠い行為。
故に、俺は自殺を失敗してしまった。
学校の屋上から、ただ単純に飛び下りれば済むだけの話だったの
だけれど、それでも失敗してしまった。

俺が通うこの学校、

県でそれなりの知名度を誇る進学校。私立呈陽学園の屋上には、
俺みたいな自殺志願者防止用のためのフェンスは残念ながら設けら
れていない。

今までこの学校で自殺がなかつたのがどうにも不思議にしか感じ
られないのだが。しかし、今までに自殺した生徒は一人も居ないと
いうのが事実。

一人も、だ。

なら学校の敷地内では？

といった疑問も当時は抱いていたのだけれど、結果は変わらず誰
も居ない。

それも校外でもだ。

ほんと、可笑しな話である。

それなら、

それなら俺がその最初になつてやるつ。

初めての自殺者に俺がなつてやるうではないか……とその当時そんな風に考えてしまつていた自分が、今では恥ずかしい限りである。自分は人とは違う。

そう周りに自分という存在の定義を知らしめてやりたかったのだう。元々はそんな馬鹿げた考えを有している訳ではないのだけれど、ただ、それは唐突にそう思いついてしまつただけであつて、浅はかな考え方でしかなかつたのだ。

「しかし」

俺は、頭から溢れ出でている赤黒い液体を前にして、屋上の堅いパネルに横たわつていた。

「まさかバナナの皮を踏むなんてな……」

呆れながら言つ。

しかし、過ぎてしまつた事を今わざわざいついつ言つ氣にもなれない。

小嶺史哉。

バナナによつて自殺を阻止される。

「なんていふか……滑稽だ」

ほんと、恥ずかしいにも程がある。

たかがバナナの皮一枚で、ここまで熱く決心したこの俺の熱い決意をこうも容易く邪魔をしてくれるなんて。しかもバナナの皮といつたもんだ。これじゃー親にも満足に顔合わせられねーや。自然と笑みが零れてしまう。

顔が血まみれで、決して楽しそうには見えないのだけれど、それでも俺は心底笑つてみせた。

けれど、それは別に樂しき余りに零れた笑みではなく、嫌味つたらしく、

失望の意を込めて、

そして、それらを含めてただ呆れながら 笑つていた。

なんだ、神様ってのはそんなに俺を死なせたくないのか？

「……けど、まあ」

俺は重い上体をゆっくりと起こす。冷たい風が頭に嫌に響く。

「バナナの皮はねーだろ、普通」

言うと、何とか立ちあがった俺は血を流し過ぎたせいなのか足もとがふら付く。

気のせいいか？

なんだか目がかすんで見えるのだが。それに、膝が踊っているようにも感じる。

「つてあれ、なんか…これ、死亡フラグじゃね……」

「

小嶺史哉 再度床に倒れた。

それは同時に、意識がそこで途絶えた事を意味していた。

『僕には超能力があるんだ』

これは俺がまだ幼少時代のちょっととした一文である。

自分作文。

これは国語の時間に行われた授業の一環の一つなのが、正直、よくもまあこんな先生のことをお母さんと言い間違えてしまった時のような恥ずかしい事を平然と言えたものだと、今では良き思い出、変えられない歴史な訳なのだが。しかし、だからと言って後

悔していない訳では当然のことながらそれは全く違う。

もし、未来から来たネコ型ロボットが居たとしたのなら、是非ともタイムマシンを使わせてもらいたい。

机の引き出しの中に広がる四次元の世界に勢いよく飛び込みたい。そもそもつて、ついでに頭が良くなる薬を貰いたい。正直なところ、これが本音な訳なのだがあくまでついでだ。そこは黙つて目を瞑つてももらいたい。

未来から来たロボットなのだから、その不思議な不思議なまつ白なポケットの中からそいつた道具が出てきても、なんら可笑しくはないだろう。

まあ、未来から来たつていう時点で既に可笑しくはあるのだが。それに、もともと俺の部屋には机なんてものは存在しない。

アニメの見過ぎか？

いや、日本を代表する子供から大人まで幅広く親しく愛されてきた長編アニメなのだから、この場合俺はまともな思考の持ち主なのだろう。

アニメ万歳。

そしてありがとう、ネコ型ロボット。

しかし、まあ、

そんな夢のようなことはある訳でもなく、あの当時の俺は本当に自分には人とは違う、人にはない摩訶不思議な力があるのだと現実に信じていた痛い少年だったわけだ。手のひらを中空の翳せば、そこから火の粉が出現するのだと本気で思つていたのだ。

実際問題。

もしも、それが本当に起こり得る事だったとしたとしても、現実的に考えてみればそれは社会の注目の的になつていただろう。

マスクミやパラツチに追われる毎日。

悪く言えばそれ事態も情報操作され、俺は何らかの実験対象となっていたのかもしれないと 考えるだけで嫌気がさす。

これが普通の考え方だ。

素晴らしいぐらいに、な。

けれど、俺はそこまで出来た人間ではない。

出来た とは変な言い方なのだが、普通と言つたほうがこの場合は適切なのだろう。

あの当時は、もしも欲にまみれの薄汚い大人たちに捕まつて何やら危ない実験にモルモットとして扱われたと仮定しても、その時にはそこに居る研究員全員を殺してでも抜け出してやる 一見、危なっかしいように聞こえてしまふかもしけないが、いや、実際危ないのだけれど、もしもそんな事態に陥つてしまつたとしたら、人は普通どういった事を思い浮かべ考えるのだろうか。

ようはそういう事だ。

ただ、俺の場合はそうだつただけで。
個々人の思考なんて、それこそ分からぬというものだ。
だから言わせてもらひつ。

「 ここは何所? 」

....

俺はベッドに横たわっていた。

白をベースにされた天井、消毒液の匂いが立ちこむ独特な匂い。そして、仕切りによつて隔離されたベッド。

自分からしてここはとても、とは、いささか言い過ぎではあるが、しかし別にそう俺が思つたとしても世の中が一気に一転する訳ではない。当たり前な話だ。

おかしな話、国々の首相もとい大統領もとい國を統べる人間の一言で世界が変わると張る人間と、それに反対の意見を言い張る

人間の差といつもののは、一体どこがどう違うのだろうか。

正直なところ、それには俺は何も言えない。

そんなもの、誰にも分からぬからだ。

正義を仮定にして例えるなら。

己の正義を真っ向から受け止め、信じ、認める為に世界を敵にまわす人間や、正義という言葉を使って人々を惑わす人間や、世界を崇拜して、おのれ自身を犠牲にする人間など、正義という言葉の形は人それぞれ、個々人によつて変わつていくもんだと、俺はそう兄から教えてもらつた。

俺も、それには「もつともだ」と頷くだけだが、それ事態も実際のところは間違いなのかもしないなんて、今では思つてゐる。戦争を起こす。

そう心に決めたある国の首相も、己が持つ信念、正義に基づいての選択だつたのかもしれない。

そう考えてみると、世の中、かもしれないだらけな世界なのだと錯覚を起こす人間も少なからずは出でてくるだろ？
現に、俺がそうだから……。

「ふわふわして気持ちいい」

話がよからぬ方向に百八十度逸れてしまつたが、ここでもう百八十度戻すとしよう。

ふわふわした布団が、思いの外俺の心を集中的に揺すつてくれるこのベッドは、ここ最近に新しく学校が仕入れたものだ。よつて、まだ新品とどうようの匂いが鼻を突く。

うん、保健室だ。

どうやら俺は、保健室のベッドに横たわつてゐるらしい。

どうして俺がこんなところに居るのかは言えないのだが、しかし、さつきから頭がジンジンする。
つか、痛い！

割れそなぐらいに痛い、痛すぎる。

咄嗟に手を頭にまわす。指先が頭に触れた瞬間、手触りからして包帯だろ？

それは俺の頭に何重にも巻かれていた。

一体誰がしてくれたのかは残念ながらそれは分からぬ事だが。多分、その心やさしき御人が俺を此処まで運んでくれて、拳句の果てに大急処置までやつてくれただけでも嬉しい限りだ。

救急車を呼んでくれれば一番良かつたのだが。

うん。

そこは黙つて目を瞑るとしよう。

「 大丈夫？」

痛みにある程度慣れたと自分に言い聞かせていた俺の耳元でぶつきらぼうに話しかけてくる声が聞こえてきた。

「 …… 月か」

濃い赤色をした髪は腰辺りまで綺麗に伸ばされており、右耳にシンプルなシルバーアクセのピアスが顔を覗かしている。

目まで隠れるまでに伸ばされた前髪の隙間から大きな黒い瞳が窺える。

俺が所在するクラスの出席番号12番。

一回も会話と呼べるもの交わした事が無い坂本月の姿かたちがそこにはあった。

「 最初は驚いたわよ。だつて、屋上でアナタが倒れているもの後ろ髪を氣だるそうにかき上げ、後ろの方でひと束に結ぶ用。

ピンク色の可愛らしいショウショウだ。

「 あー、…………うん。そうあれだ。バナナの皮をついつかり見事に踏んづけてしまつてな。気づいたらここに寝ていたんだ。ここまで運んでくれたのはお前だろ？ ありがとう」

「 別に、運んだというか、襟を持って引きずつてきたんだけど……、アナタがそう言ってくれるなら、謝らなくても済むわね」

「いや、謝れよ

引きずつてきたってどういってんだよ。

何だ、あれか？

重いから引きずる」としか出来なかつたの とか言つたじゃ ないだろうな。

確かに、お前の体格からすれば俺の頭一つ分低いか？
自分より体積のある人間を運ぶのは難だと思つ。
しかも女なら尚更だ。

だがな、

それでも他に方法とかあるだろ。

だからか？

両ひじの制服が綺麗に擦り破けているのは。
血出てるよ。

ベッドが赤く染まってるよ。

「いやよ、面倒くさい」

「やつきの言葉は嘘だつたのか！」

つきまして、

俺は自分のベッドに仰向けになつていた。

あれから、俺と坂本は少しの時間軽い世間話を展開させていた。
しかし、それでも限りある時間を満たすことが出来ず、そのまま
俺たちは学校を後にした。

駐輪所から自転車を持ってきた俺は「送つてやるよ」とやれしく
営業スマイルを月に向けたのだが「大丈夫、私の家はここからそう
遠くじゃないから。いい別に、その優しさだけでも有り難く貰つ
てあげるよ」と、全面的に拒否されてしまった。

俺はしぶしぶ「分かつた」とだけ言つと、そのまま月と別れた。
そして今に至る。

「……痛い」

やれりといふか、今日そこのひじや傷の痛みが癒える訳でもなく、今は安静にして寝返りをうつ俺。

取りあえず今日は何もせず黙つて寝よ。

痛みに夜中何回も起こそれそな不安が脳裏を過つたが、それはしかたがない。

ここは黙つて寝るに限るつてもんだ。

うん、それが得策だ。

「まあそういうことだから ひとつ

力チツと、リモコンを使い証明を消した俺は毛布を肩上まではおつた。

「…………」

まあ、そんなに上手く事が進む訳がないのが小嶺クオリティーの真骨頂。

俺は口だけを動かした。

「……なんだよ、舞

俺が寝ているベッドの反対側にあるこの部屋唯一の出入口のドアから感じる視線。

「用が無いんだつたらさつさとそこ閉めろ。冷気が俺の体を蝕む

「つ、何よ！せつかく心配してやつたつていうのに！」

言つと、俺の妹、小嶺舞が部屋に入ってきた。

「うるさい、只今ガラスのように纖細でデリケートな俺の頭が危うく砕け散りそうだつたぞ

綺麗にな。

「何で私のせいなのよつ、理不眞じやない！だいたい、もとはお兄ちゃんのまぬけな生活が原因でしょー！」

「キレるなキレるなマジでキレるな。分かつたから、十一分に分かつたから怒鳴るのを止めてくれ

本当に砕けそうだ。

「つたぐ、もう。……それで、大丈夫なの？」

「ああ、ざつと一ヶ月程度で治るつてぞ」

「それって地味に大事じやない？ 本当は何て言つてたの、病院の

先生」

「一週間と二日だそうだ」

「ふーん。よかつたじやない、大した知識も詰まつてない頭が無事で」

部屋の照明をつけないまま、廊下の明かりで微かに部屋の中が見える視界の中、舞はガラステーブルの上に腰を下ろした。

「そのまま植物人間にでもなればよかつたのに」

見ての通りツンツンしている妹だ。

「悪かつたな、お前にこんな元氣で不快感が絶好調の俺の姿をさらけ出してしまって」

「せらけだすぐらいだつたら、服でも全部脱げばいいじゃない。ま、脱いだら殴るけど。……モーニングスターで」

妹よ、そこはせめて知名度のあるもので殴れ。その選択は明らかに失敗だ。それとお前はそんな鈍器持つていらないだろーが。

「モーニングスターとは手厳しいな。……ま、ありがとよ」

心配してくれて は、あえて言わなのが、妹に対する俺からの礼儀だ。

「ちよつ、何よ、いきなり改まつて！ 気持ち悪い！」

「はいはい、どうせ私は気持ち悪いですよーだ。だから早くお前も寝る。明日起きれなくなるぞ、主に俺が」

「最後のはよけいよ！」と言つと、舞はドアノブに手をかける。

「…………心配したんだから」

微かに聞こえた言葉と同時にドアが閉まる。
最後にデレをみせてくれる良き妹、舞。

テンプレ過ぎだと思うが、それが我が妹である存在の証しだ。

「…………シンデレはやっぱりテンプレに限るな」

しかし、シンとデレの比率は八対一ぐらいだが、まあ気にしない

でおり。

「寝るか」

俺は再度瞼を閉じた。

11月5日。

そろそろこじたつが恋しくなる冬到来の曖昧な時期。
今日にもこたつを出さなければ危ないそんな夜、事前の連絡もなく月がやってきた。

「こんばんは。今日はやけに冷えるわね、小嶺君」
突然の訪問者であるクラスメイトが、別に聞きたくもない言葉を並べて玄関の前に立っていた。

「んなもん分かってるつーの」「あら、えらい酷い事を言つのね。あなたは私に恨みでもあるのかしら」

と肩を震わせ、私は今とても寒いの、だから早く家の中に入れてとでも言いたげに手を摩てくる。

「こつは俺に何を求めているのだろうか。

当然そんな事分かるはずでもなく、すんなりと彼女を家の中に入れてやる俺はあまり男に違いない。

はあと自然に溜息をついていた。

月は、靴を脱ぐなりズカズカと廊下の突き当たりにある階段を上ると、上つたすぐに設けられたドアを開け中に入つて行つた。

俺の部屋である。

部屋の中心に置かれた丸いガラステーブルの横に腰を下ろすと、「何をしているの？アナタも座りなさい」と、ドアの前で立ち戻りく

していた俺に命令形の言葉を吐いてくる。

「ここはお前の家か」と呟きながらも、ドアを閉め命令に忠実に従う。

今の画を説明すると、俺と月は面と面、顔と顔を向かい合わせながらガラステーブルを挟んで座っている。

「で、今日は何しに来たんだ？」

「喋り出すなり下ネタを言つあなたに、私は憐みの眼差しを送るわ」

「その発想に至つた事に、俺は嫌悪の眼差しを送るよ」

「何を言つているの。あなたは馬鹿なの？」

取りあえずシカトをしてみた。このままいけば無駄に長く続きそうだと悟つたからだ。主に会話が。

しかし、俺の配慮も空しく田の前の少女は喋る事を止めてはくれなかつた。

しううが無く付き合つてやうつと、諦めながらも月の無意味な言葉遊びに相槌を送る。

坂本月十七歳。

俺が通う私立星陽学園のクラスメイトである女子生徒。

俺は彼女から命を救われた。学校の屋上で頭から血を流していた俺を最低限の応急処置を施してくれた、猫を被つたツンドラな絶対女子高生。今だから言える事だが、俺は彼女から命を救われた事に少なからずの後悔を抱いていた。

理由は言わずと知れた、絶対的な強者の彼女に原因がある。

彼女、坂本月は、学校では物静かで地味な印象が強い優等生の位置付をされている。しかし、実際にこうして会話を展開させてみれば、その誤った認識が嫌に露わにされていくのが驚愕だ。

人を物と置き換えた発言や、唐突的に物を投げつけてくるなど。色々と性格面を見直してもらい点が幾つも上げられる。

それが彼女の真の本性。

善良で固められた表とは対照的な裏の顔。

偽善という言葉がよく似合う俺の数少ない友人の一人だ。

十五分程経過した頃、会話に終止符が唐突に打ち込まれた。

「殺人に興味はない?」

何時もの理解しがたい言葉とは全然違うそれは、何の脈略もない言葉だった。

「……別に」と合わせてはみたものの特に会話が終わる訳でもなく、月はピンク色の唇を動かす。今日はグロスを塗ってきたのだろうか。

「私は興味があるの。殺人者がどうやって人間を殺すのか。どんな気持ちで人間を殺そうと考えたのか。不思議に思わない?メディアでは犯人のその時の心情を文字として記載しているけど、殺人者本人の心情は全くとして違うものかもしないし、あまり差異がないのかもしれない。だってそれは殺人を犯したその人本人にしか分からない事なもの」

そこで一時言葉を止める。

一気に話した事で酸欠でも起こしたのか、息を荒げる。少し色っぽい吐息が耳に入るのを感じた。

「まあ、確かに。言われてみればそうなのかな?」

「そう。全くその通りよ。だからね、小嶺君。私は殺人に興味があるの」

ほほ笑みながら言う月。

それを見てどんな表情を浮かべれば良いのか一人悩む俺。妙に気まずい雰囲気がこの部屋を占めていた。

「そういう事だから小嶺君。あなたもこの題材に興味を持ちなさい。と言つよりも趣味として扱いなさい。私はこの題材をあなたにリスクptonするわ」

「魅力的じゃない」と、俺の向け人差し指を突き指してくる。人様に指を指してはいけないと、こいつは幼少時に親から教わらなかつたのか。

「……でもよ」

ここで俺は、月が言つた言葉の綻びについて問い合わせる事にした。
「もし仮に俺がその意見に同意して、殺人に対して趣味の中の一つに取り入れたとしよう。けれど、その後はどうするんだ?」
もつともな意見を言つてみせた俺は、テーブルに置いていた缶ジースを手に取る。

「そんな事、決まつてないじゃない」

残り少なかつた中身を飲み干し、テーブルの上に置いて俺はもう一度口を開いた。

「殺人でも起こすつもりなのか?それなら俺はご免だぜ。この年で務所には厄介にはなりたくない」

「何を早とちりしているの?あなたは本当に馬鹿なのね。いい、私が考えたプランをこの瞬間この時間この空間で、今から小嶺文哉という男に説明するわ」

言うと、その場に立ちあがり垂れ下がつた髪を一結びに仕上げる。やつぱりこいつは、俺がポーテール萌えだと分かっていての行動なのだろうか。

「殺人はしないし殺人に近いものもしない。務所に厄介になるのは私も嫌なもの。 だつたら、手段は一つ。選択は一つしかないのよ」

テーブルに片膝を乗せ俺の顔数センチの所まで顔を近づける。ほんのりとシャンプーの匂いが自然と鼻をくすぐる。

殺人に近いものが何なのかふと疑問に思つたが、あえて月に質問をする感情を無理に押し殺し、俺は彼女の次の言葉を待つ事にした。

「殺人をしなければいいのよ」

「…………え?」

間抜けな声が無意識に外に出てしまった。

というよりも、はて、さっきのは俺の聞き間違いなのだろうか。

「殺人をしなければいいのよ」

大事なことなので一回言つてみたらしい。

そして、やつきのはじりやら聞き間違いじゃなかつたようだ。

不思議だ。

自信満々に言つたに違ひないのに、どうしても違和感しかみつからない。

「何コイツ、頭可笑しいいんぢやないつて思つてゐる顔をしているわね。だからあなたはゴミなのよ。いい?最後まで聞きなさい」呆れた表情を露骨に浮かべ、真つ黒な瞳を細めて口を開く。馬鹿からゴミに降格していた事には触れないでおこうかと思つ。また話がややこしくなるに違ひないからだ。

「殺人はしない。ならどうするか、という壁に道を遮られるのが関の山なのだけれど、考へてもみなさい。殺人が出来ないのなら他の誰かにそれを行つてもらえば話がすむのよ。ね、簡単な事でしょ」窓を閉めているので風がふいている訳がないのにも関わらず、彼女のスカートは揺らいだ。そもそも、そんなに寒いのなら何故スカートを穿いてきたのかが理解できない。これが女性だからなのかは分からぬし、俺が男だからかも分からない。男と女の服に対する感性の違いが嫌に分かる光景だった。

しかし、

俺はすぐ目の前にある彼女の顔を直視できず、無意識に俯きながら自分の両手に目を向ける。右手の親指の第一関節がつっすらと切れている事に気がついた。

「話を聞いているの小嶺君」

何時まで経つても返事が返つてこなかつたので、月は半分苛立ちを含めて聞いてくる。

「聞いてたよ。つまりお前は、自分が犯罪者になりたくないからそれを他人に押し付ける、つて事だろ?」

「平たく言えばそういう事になるわね」

「別に平たくは言つてないだろ。……まあいか。んで、そんな都合のいい人間がこの町に居るのか?そしてそんな奴をお前は知つてゐるのか?」

当てがあるのかと後に続ける。

多分ないだろうと俺は思っていたのだけれど、それはあくまで俺自身の浅はかな考へであつて、実際問題、それはそうでしかなかつた。

「当てならあるわよ」

思いがけない言葉が返事として返される。

「呈陽学園高等部三年、尚江皓十八歳女子。」この人よ

俺は俯かせていた顔をゆっくりと上げて、月の顔を凝視した。

尚江皓 僕は彼女を知っていた。

それも当然の事だろう。

何しろ彼女は学校一のマドンナの位置づけを受けているからだ。成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群、性格は申し分ない。

そんな彼女に好意を抱かせる生徒は俺の知る限りでは数知れず。正直信じられないが、彼女は誰がどう見ようと完璧な人間だった。しかし、俺からみれば、彼女は生きているだけで死にそうな、そんな見ていてるこっちが肝が冷えてしまう程にちっぽけで小さな存在だと俺は初見でそう思つた。

完璧な人間。

出来過ぎた人間。

周りの人は彼女の事をそう言い称えるのだけれど、果たしてそれは本当に彼女に向けてよいのだろうか。

確かに、彼女はその言葉が似合う。完璧という定義が十分に最適な人材なのだと俺も思う、思うのだけれど、そうなのだけれど。俺には何かを我慢している。何かを抑制しているとしか見えなかつた。しかし、と俺はそこで思考を区切る。

「何で彼女がそれに関わっているんだ」

心の声が音声として口から出でていた。

それだけ、俺は驚いていたのだろう。

「何でと言わても、尚江女子がそうであるからの何者でもない

からよ「よ

月は近づけた顔を離し、テーブルから下りた。そしてそのまま衣服の乱れを直すと、ドアの方へ足を歩かせる。

ドアノブに手をかけ、ガチャリと開けると一言「今日はもう帰るわ」と、別れの言葉を言つてドアを閉めて行った。謎を残した状態で。

…

十秒ほど経つてから玄関が開く音が微かに耳に入り、本当に帰つたのだと安堵に酔いしれる。

その場に立ちあがり部屋の端にある本棚に行くと、綺麗な階段状に並べられた本の中から一冊を手に取る。以前から読んでいるサイコホラー小説だ。妹である舞から薦められて読んでみたのだが、元々自分はホラー小説を苦手の類に入れている。しかし、思っていたものよりも興味をそそる点が幾つもあり、俺はすすんでこの小説を読む行動が、今の日常になりつつあった。

小説を取り出してベッドに足を歩かせると、ふと足元に白い紙きれが落ちていてる事に気がついた。

そこには、ついさっきまで月が座つていた処だったので、これは月の落し物なのだと推測する。

拾い上げ、どうやらこれはメモ帳を破つたものらしい。そして、それには一言、大きな赤い文字で何かが書かれていた。

「星陽学園部ブログ……？」

書かれている文字を声に出してみる。他にも何か書かれていなかとかとひっくり返してはみたが、裏には何も書かれておらず、ただ

の白紙であった。

赤字で書かれたこれを、俺は少し不気味に感じた。

感じたのだけれど、俺はすぐに感情を押し殺す。不気味と感じたところで、それは間接的に月を侮辱する事と同等だからだ。

俺は、この文字の意味を追求しようとはせず、そのままベッドに飛び込んだ。

仰向けになつて、日の前に小説を開き、昨日読んだところから読み始める。

日常を現在進行形で展開させた。

当初の目的であったこたつの準備をする事を忘れ、俺は真剣に規則的に並べられた文字をなぞるように日を動かす。

室内の温度は徐々に低くなつていく。

そろそろ舞が部屋に顔を覗かせる時間が刻一刻と迫つていた事に気が付く事もなく、自分の世界に身を置く小嶺文哉十七歳。

今の時間は、ちょうど八時を過ぎた頃だった。

次の日、俺は朝早くから月に呼び出しを受けていた。

朝目が覚めて、枕もとに置いてあつた携帯が青い発光を点滅させていたので、脳が完全に目覚めていないなか携帯を開いた。ディスプレイにはメールのアイコンが一件。誰からかと聞いてみるとそこで後悔した。

メール一件

宛　『奴は坂本月』

題　『見たら開きなさい』

本文　『学校に着き次第屋上に来なさい。』

何ともシンプルな本文だと溜息をつく。そして伝えたい事をこれでもかと強く主張している本文を、俺は見るのが初めてだった。それにしても「見たら開きなさい」とはどんな題名だよ。これも始めてみるものだつた。

理由が理由だが、俺はしぶしぶ従う形で学校に行く準備をした。偶然だろうか、今日は何時もよりも早い時間に起きてしまった事に少しばかりの怒りを感じたのだけれど、すぐにそれは脱力感に変わつていた。

家を出て、明らかに登校時には味わえない冷気を体全体に浴びながらも目的地である学校に足を歩かせる。きっと、俺の前世はどこか名家の家来だったのだろう。皮肉に俺はそう思った。

そして今に至る。

教室に着くなりそこには月の姿は無く、じょうがなく冷え切つた携帯でメールを打つと返事は早く返された。

題　『ハミ（笑）』

本文　『つて言葉は、あなたみたいな人間の事を表しているのね。凄い発見だわ。私は屋上に居るから早く来なさい。』

題名と本文が繋がっているメールは大変珍しいのではないかと溜息をつく。これで一回目の溜息をついてしまった。ペースが速いように感じる。

クソ！

本気で思つてしまつた俺は、果たして短気なのだろうか。つとこうよりも、これは当たり前の反応だと自分にフォローを送る。

「……惨めだ」

しかし、フォローだけではどうしようも出来なかつた。

「月の奴、覚えてろよ」

そう言つと、足を屋上に向け走らせた。勿論、メールの内容に従つた訳ではなく、あくまで彼女、坂本月に文句を言いに行く為にだ。せつかくだから田代の棘がある暴言の数々の分も言つてやううと強く心に思い、階段を勢いよく駆け上がつた。

バン！

最上階の階段を登りきり、突き当たりにある両開きのドアを荒く押し開けた。

瞬間、冷たい空風が俺を襲つた。

襲つて、同時に野球ボールが顔面にめがけて飛んできていた事に、気づくことができなかつた。

ゴツッと音とともに後ろに倒れる俺。いきなりの事で頭が混乱しているそんな俺に追い打ちをかけるように後頭部を冷たい床に強くぶつける。

痛みが顔の前後から襲つた。

「……何をしているの、小嶺君」

顔を両手で押さえ悶える形を強いられた俺に、ドアの方から声がかけられる。

月だ。

「あなたの行動一つ一つにとやかくは言わないけれど、私はあな

たに助言を送るうつと思うわ。

馬鹿なことは止めて、早く自分が埋まる上に建てられるであらう
墓石の準備をしたらいいんじゃない?」

会つて初めに言つて言葉ではないだらうが。

俺は上体だけを起こして月の顔を捉える。

「……見てみろよ。これ、鼻血なんだぜ」

皮肉に俺はそう言つた。それしか今は出来なかつたからだ。

月はクスッと一瞬だけ口を釣り上げると、手を差し伸べる。俺は
無言で彼女の手を掴みあげ立ちあがる。

「大丈夫、小嶺君。鼻から血が出ているみたいけど、痛くない?」

「不思議だな。気遣つてもらつていてるのに、何だか腹が立つよ」

「それは少しばかりの気の迷いよ」と当の本人は平然と言う。俺
は足もとに転がっていた野球ボールを拾い上げると月に手渡した。

「これ、お前のだる」

「あら奇怪。何でさつきまで握りしめていた私のボールがこんな
ところに落ちているのかしら?」

「それはだな月。お前が俺めがけてそれを投げ入れたからだよ」

「そうなの。不思議な事もあるのねえ」

「何他人行儀な発言してるんだよ」

「あら? 私とアナタは他人でしょ? それにアナタは誰なの? 間接
に一文字で答えて頂戴」

到底答えられないような発言をするこいつには良心と呼べるもの
があるのだろうか。俺は「んで、昨日といい、今日は一体何のよう
だ?」と話を変える。

「質問の意味をお分かり? アナタはカスなの?」

しかしそれは出来なかつた。そしてまた振り出しに戻つてしまつ
た事に脱力感が一斉攻撃を仕掛けてきた。

「……我」

取りあえずそう答えてみるが、特に意味は無い。

「今日はあなたに確認してほしい事が一件あるの

ものの見事にスル をされてしまった。脱力感が一気に増す。もう何だか話すのもダライと逃げを考えてみたのだが、俺にはそんな事は許されないようだ。

月は次の言葉を言つ。

「尚江皓女子に会いに行くのよ」

無表情で言つので、こいつが今から尚江皓を締めに行くぞと錯覚が起きてしまった。

まあそのままの意味だらうと再確認をしようと思つ。

「会いに行くつて。急すぎるんじやないか？」

「急も何も、事は早く起しきなこと手遅れになるわよ

別にそんな事はなんじやないかと思つ。それに、手遅れになるのはお前の頭なんじやないかと上げ足を取る。井、既に手遅れだと思うがな。

月は俺の横を通り過ぎて階段を下りて行く。「どこに行くんだよ」といぢょう確認をしてみるが返事は……ま、言わないでいいか。

「会いに行くのよ」

そう言って止めた足を再度指示を送る。俺は無言で月の後を追いつになつていた。

朝早く、誰も居ない教室の端の席に尚江皓は居る。理由は分からぬ。

ただ彼女が単に早起きなのかは聞いたことが無い。、そこにはちゃんとした理由があるのかもしれないし、無いのかもしれない。彼女は何時も本を読んでいる。

学校側が用意した本とは違い、TUTAYAで仕入れた小説を、だ。

TUTAYA特有の茶色いブックカバーをはめた小説を、静かに、ゆっくりと。

なので、彼女が何を読んでいるのかは謎だ。

その印象に合った難しい文字が規則正しく並べられた本でもあれば、そぐわないライトノベルを読んでいるのかもしれない。

ただ分かるのは一つ、彼女は文字を読む事が好きだという事だけだつた。

それ以外の詳細は誰も知らない。

彼女の好物や、趣味や人との間柄など。

面白いぐらいにそれらは深い密林の先に隠されているのだ。そして今日も彼女はそこに居た。

窓わきの一番後ろの席に、初めからそこに居たかのように悠然と

彼女は座っていた。

彼女の手には本が握られていた。

茶色いブックカバーをした本を。

彼女が本を持つと凄く画になると思った。
思つて、同時に彼女の存在が不気味だと感じていた自分が、そこには居た。

「御話がしたい？」

今、俺と月は西校舎三階にある二年二組の教室に居た。

「はい。尚江先輩に一つお聞きしたい事がありまして」

月が尚江皓と会話を開始しようとしている中、俺は横で一人を観察していた。

学校指定の紺のブレザーを上手い具合に着崩している月とは対照的に、御手本としか思えない完璧な着こなしをしている尚江皓。

俺は、一人が全面的に正反対な人間なのだとthought。

しかし、説明出来ない違和感も同時に思つてしまつた。

そう、腹の内側にあるシコリの様な、そんな小さな違和感を。

尚江皓は途中であつた本に栄を挟み閉じると、机の中に入れて月の方へ顔を向ける。

「いいよ。後輩がわざわざこんな朝早くに登校してまで私に質問をしたいと言うんですもの。断れるはずがないわ」

フフツとほほ笑みながら彼女は「それで、聞きたいことはなにか

しら？出来得る限りお答えするわ」と、優しく言つ。

「ありがとうございます」

言つと、月は彼女の優しさに甘える事にしたらしい。というよりも初めから質問するつもりだったのだろうと、俺は尚江女子に、月に代わつて謝罪の意を込めた眼差しを送る。それに気付いたのか、彼女はチラツとこっちに目を向けるとまたほほ笑みを浮かべる。

ちょっとドキッとしてしまった自分に、俺は何も言えなかつた。それよりも、隣から嫌なプレッシャーを感じるのだが、これは気のせいなのだろう。

「それで、話とは一体何なのかしら」

「はい、先輩の交流関係です」

「交流関係と言えば、友達関係の事かしら？」

「はい」

礼儀正しく答える月。学校で振る舞う何時もの坂本月だ。見た目こそ不真面目のそれとしか言いようのないものだが、それに比例するように彼女の口調は物静かなものだった。

猫を被つているそんな月の姿は、とても自然に感じる。慣れとはこうも視野が広がるものかと関心を抱く。

「私の交友関係に何か疑問もあるのかしら？」

「その事なんですが、先輩は友達と呼べる人間は一体何人ぐらいの数を把握しているんでしょうか？教えてもらえないですか？」

不思議な事を聞くわねといった顔をして、尚江皓は「そうね……

と悩む仕草をする。

一時の間、とは言い過ぎだが、彼女は月の意味不明な質問に優しく答えた。

「沢山……かな。数えられない程、私は人間との関わりを持つていると思うわ」

凛とした花のよう、相手に不快な思いを抱かせないよう彼女はそう答える。

俺はそこで改めて尚江皓が出来すぎた人間なのだと再認識をした。

どうやら俺が抱いていた彼女の印象は、謝った認識だつたのだと改めて反省した。

「そうですか。では次の質問です。先輩はその中に親友と思える存在は何人居ますか？」

「一人よ」

さつきとは違い、今回の返答は早いものだった。

彼女は言葉を続けた。

「親友とは……つまり心を許せる、本当の自分を真っ向から受け止めてくれる存在なのだと私はそう思っている。嘘は勿論の事。裏切りやその他の感情が一切として関与しない。そんな存在を、私は親友と呼ぶわ。だからね、親友は世の中に一人だけで十分。たつた一つの存在で、事足りるのよ」

と、そこで言葉は終了した。

正直に言つて、俺は彼女の言葉の意味が全くとして理解できていなかつた。ただ俺の頭がそれに追い付いていないのか、それとも一生理解できないものなのか。俺は理解に苦しんでいた。

けれど月は違つた。

「そうですか。大変勉強になります」

尚江皓の言葉を理解していたのかは定かではないが、月は平然とした素振りでお礼の言葉を述べる。

月の今の心境は多分、嬉しさ反面やつぱりだつた、と思っているに違ひない。

彼女の思つている事が、俺の視点から見ても嫌に分かつてしまつ。月は微かに笑みを浮かべていたのだ。

何かを確信したような、探し物が唐突に見つかつたかのようだ。

今のは質問で、それなりのものを確かに掴んだのだろう。

「今さつき先輩が教えてくれた親友の名前は何ですか？出来れば名字も教えて頂けると嬉しい限りです」

「折原伊織。おじはらいおり隣のクラスである三年一組の同学年女子生徒よ」

質問に一言付け加え、尚江皓はさぞ嬉しそうな口調で答えてくれ

た。それほど、親友と称するその同学年である折原伊織という女子生徒の事が大切なのだと、自然と思えてします。

彼女にしてみれば、親友に関する事なら半日経っても動かす口を止めはしないだろうと、俺は不思議とそう思つてしまつた。

尚江皓という人間の存在が、話してはいないのだが、直にこうして対峙してみると噂通りの人間とは微妙に違う。友達思いの普通な女子高生としか見えなかつた。

今でも幸せそうな笑みを崩さない尚江皓に対し、月も同じように笑みを浮かべる。

こうして見れば彼女は普通に美少女の類に入ると思うのだけれど、これが単なる猫を被つている事を知つてゐる俺には、ただ苛立ちの他でもない負の感情しか湧き上がらなかつた。

今の時間は八時を丁度過ぎた頃。

そろそろ他の生徒がこの学校に到着をし始める時間帯だなど考へてゐる俺の横で、月も同じ考え方をしてゐるのだろう。

「…では、これで最後の質問です」と、規則違反である派手なピンク色の腕時計を確認して、月は目の前の机に両手をつける。彼女の目には、目の直ぐ先に座つてゐる尚江皓しか映つていない。

この時、文哉は月の言葉の意味が理解できなかつた。

それも当然、だつてそれは彼が予想していたものとは違つていたからだ。

別に、質問の意味は理解できたのだけれど、何故今その質問をしたのかが分からなかつたのだ。

そして、その質問に対しても尚江皓の顔が不思議な程に歪んだ事に、文哉は違和感を覚えてしまつた。

尚江皓というラベルが剥がれた瞬間。
完璧が、完全が否定された事実。

月はゆっくりと口を開く。

はつきりと、間違えないように 月は言った。

「その、親友と呼ぶ彼女は 今何処に居るのでしょうか」

緊迫した空気が不気味に漂う。

今現在、俺はそんな空間に身を置いている。

俺を含めた三人しか居ない教室は、可笑しな程に静まり返っていた。

：

た。

太陽の日差しが気持ちいいぐらいに窓から差し込む席に俺は腰を下ろしていた。

教卓に一番近い窓際の席。

勿論俺の席だ。

今の時期にとても助かる席なのだけれど、夏になると嫌がらせの他でもない攻撃を仕掛けてくる憎まれ役の可哀相な席。

そんな席に俺はここ一年と半年近くまでげずに居座り続ける。

何しろ此処が俺指定の席だからだ。

当初は席替えを担任に強く要求していたのだけれど、何回ものアプローチも無駄に終わり、今でもこの席に毎日座っている。

担任曰く『他の人も同じなんだから、お前だけ特別扱いは出来な

い『らし』い。

その意見には俺も納得するしかなかつたのだが、それでも諦めきれない自分が居た。

『それなら窓側の席の人と廊下側の人を入れ替えてみてはどうですか？それなら俺だけが特別なんて誰も思わないでしょう？』と反撃を試みたは良かつたものの、返事は『駄目だ』の一点張り。自然と俺が手を引く形になつていた。

しかし、俺は今でも諦めていた訳ではなかつた。

反撃の機会をただ静かに待つていたのだ。

そして今現在、俺はその機会を得ていた。

俺の横に設置された窓ガラスが綺麗に無くなつていたのだ。

それがクラスメイトである坂本月による犯行だとは容易に分かつた。だつて机の中に置いていた国語用の大学ノートの表紙に、でかでかと黒色のマジックペンで『自然の猛威をそこで味わいなさい』と書かれていたからだ。

普段だつたら怒りしか思いつかないのだが、今日に限つては良くなつたとお礼の言葉を送りたいぐらいだつた。

体を反転させて、直ぐ後ろで黒板に書かれた文字を淡々とルーズリーフに書き写している確信犯に親指を立てて「グッジョブ」と言つてやつた。

しかし、そんな俺の行動に何も言わず動かす鉛筆を止めないクラスメイトを。無視をきめてくる彼女に俺は何も言わず「ありがとうな」とだけ言つて再度前へ振り向いた。

今回だけは見逃してやろうと心の中だけで月の失礼極まりない行動を許してやつた。

さて、

俺は右手を天井に向か力強く上げた。

全くの歪みさえない綺麗なフォームのそれを。

そして一言「先生」と言つた。

「 であるからにして……つて、ん？どうした小嶺」

その言葉に一年一組の担任兼国語教員である三原健治(みはらけんじ)三十九歳末

婚の厳つい顔立ちをした男性が、手にした学校から配布された教科書から目をはなす。

「はい。俺の隣にある筈の窓ガラスが綺麗に無くなっているんですね」

俺は自信満々に答える。

「そうか。それはだな小嶺、窓ガラスが家出をしているんだろう。だから早く教科書を机の上に広げる」

と言うと、また教科書に視線を戻す。

俺は諦めなかつた。

「そりやー窓ガラスも家出もしたくなりますよね。だってこんなに寒いんだ。窓ガラスは最良の選択を選んだんですね」

「だろうな。私だつてこの寒い中、冷氣に身をさらけ出したくもないからな。だから早く教科書を広げる」

「先生。そんな事はどうでもいいんです。俺が言いたい事はそんな窓ガラスの心情を聞きたい訳じゃ決して違うんですね」

俺は手を上げた状態を崩す事無く言つ。

「これでは俺が風邪を引いてしまう可能性が高くなつていきます。だから俺を後ろの席に移してください」

「駄目だ。お前の考えている事など、当の昔に知つている」

けれど、彼は俺が挙げた意見もとい願望を受け流してくれた。俺はまだ諦められなかつた。

「お願ひします。とても寒いんです。もう凍えてどうしようも出来ません」

肩を震わせて俺は言つ。実際のところ、これはあながち嘘ではない。体左半分は、外から来る冷気に当たられ見事に冷え切つっていた。三原先生が何かを言おうとした瞬間、後ろから透き通つた声が聞こえた。

「先生。本人もそう言つてるので、私が彼を保健室に連れて行

きます

言つと、彼女は席を立ちあがる。

「そりゃ、すまないがその馬鹿を連れていってやつてくれ」と三原先生は溜息交じりに彼女によろしくと言葉を送る。

俺は上げた手を握られ無理やり立たされた。そして強制的に教卓の横にあるドアまで連れて行かる。

言わずと知れた坂本月だ。

俺の手首を力強く握る彼女の手は暖かかつた。
けれどそれだけであつて、今は全くとして関係のない事。
そのまま俺達は教室を後にした。

教室を後にして、俺達は保健室を目指して廊下を歩いていた。
月から握られた右手は今も放されてはいない。

俺は教室を出て初めて口を開いた。

「おい月。お前本気で保健室に行くつもりなのか？」

それははどうでもいい質問だった。

月はとこりと、振り向きもしないで質問に答えた。

「何を言つているの、小嶺君。早く行かないと風邪を引いてしま

うわ」

どうやら月は今の状態を楽しんでいるようだ。それを証明するかのように、一人きりなにも関わらず猫を被つている。

そんな月に合わせるように、俺もその遊びに付き合つてやる事にする。

「そりゃだつたな。これはすまん。変な事を聞いてしまつたな」

「何を馬鹿な事を言つているの？いいから早く歩きなさい。アナタが事を起こすのが遅いから、後十分程度の時間しか私達には残されていないのよ」

握つていた手を急に放すと、月は歩くスピードを上げた。何だか損な気分を味わつてしまつたような苦い思いが心の中で渦巻く。というよりもまた月にしてやられてしまった。こいつにとつて、俺が

あの行動をとる事を見通しての事だったのだ。だからといって、あれが嫌がらせではなかつたとは俺は考えられない。嫌がらせも含めて、あれはこの為の口実にすぎないのだろうと一人納得をする。

この学校の保健室は、東校舎の一階にある。

俺と月の教室がある一階からはそう遠くはない。

廊下の突き当たりの階段を下りて直ぐに保健室が目に入った。

俺は進んで保健室のスライドのドアに手を掛けて開こうとしたが、ドアは一ミリも動こうとはしなかつた。

どうやら保健の先生は不在らしい。

顔だけ振り向いて月に目で訴える。

月は無言で俺の隣に足を運ばせると、徐にブレザーのポケットから一つの鍵を取り出しドアの鍵穴に差し込んだ。

まさか、と思ったが、そのままかだつたとは分かり切っていた事だからそれ以上は深く考えないようにした。

ガチャリと、音の後に鍵を抜くと、さつきまで密室を作っていたドアが事無くあつたりと開けられた。

そこで一言月は「さ、入りましょう」と先陣をきつて中に足を踏み入れる。

俺も何も言わず中に入りドアを閉める。

室内は思いの外暖かかった。

これが、さつきまで此処に保健室の先生が居たのだという推測が出来る。

ちょうどすれ違ひだつたのだろう。

月は真っ先に部屋の隅に設けられた資料棚に向かうと、何の躊躇いもなく両開きの扉を開ける。

何というか、毎回こいつの行動力には驚かされるものがある。

何所からその行動に行きつく感情を引きだしているのかは分からぬが、十中八九、思いつきがその原動力となつているのだろう。

俺は資料棚の反対側に不自然に置かれたパイプ椅子に背もたれを

胸に跨る。

そして月の行動を観察する事にした。

棚の中に不規則に並べられた資料の中から五冊ほど取り出すと、一冊一冊を丹念に読みあげる。

何を知りたいのかは分からぬが、多分、尚江皓に関する事だらう。

尚江皓　完璧な人間、出来過ぎた人間と呼ばれる実際のところの先輩。

親友想いで、とても優しい良き先輩。

……けれど、あの時の彼女は可笑しかつた。

月から言われた一言『親友と呼ぶ彼女は　今何処に居るのでしょ
うか』を聞いた時の彼女の微かな反応を、俺は見逃さなかつた。微かに頬を引きつらせたその瞬間を、俺は確かに目にした。

そして、そこから生じる違和感という言葉も、確かに俺の中には生まれた。

それは小さな歪み。

違和感という名の歪み。

「あつたわ」

その言葉をキッカケに俺は椅子から下りる。
近づいて、月がそのか細い腕で抱えるように持つた資料を覗いてみる。

月の周りには幾つもの資料が乱読したかのように散らばっていた。
「これは…………生徒調査だな」

月が手についていた資料には、この学校　『私立呈陽学園の生徒調査資料』と書かれていた。

書いてあつて、今開かれているページの冒頭には見覚えのない名前が書かれてあつた。

しかし俺はこの名前を知っていた。

「折原伊織」

月は静かに、けれどはつきりと彼女の名前を口にした。

「少し不安だったのだけれど……うん。やっぱり思っていた通りだつたわ」

資料に目を離さずに、月は言葉を続ける。

「この生徒。折原伊織は、かれこれ一週間程前から学校に来ていなーいわ」

「学校に来ていない？」

俺は中腰になつて散らかつた資料を片付けながら聞く。

「そう。これによると彼女は具合が悪いといつ理由で学校側に連絡をしたのが一週間前の出来事。それから今日も含めた日にちを休んでいるの。ね、何だか意味ありげな情報だとは思わない？」

「そつか？俺は別に何も思わないけどな。ただ体調が悪いだけであつて、今でもそれが続いているとしか……」

俺は言葉を濁す。

それに気づいた月は、次の言葉を言つのは早かつた。

「今朝の尚江皓女子のあの反応を見たでしょ？これは少なからず彼女が関わっているといつ何よりも可能性よ」

「そのぐらい考えなさい」と後に付け加える。

俺は何も言えなかつた。

だつてそれは……。

「折原伊織の件に、尚江皓から何らかの関与があつた　ヒアナタは思つていいのでしきう？」

俺の考えを月は代わりに代弁し肯定させた。

持つていた資料をパタッと閉じると、立ちあがり本の場所に戻す。俺も後に続くよつに重ねた資料を押し入れる。

棚の扉を閉め、やつと月は俺の方へ向きかえつた。

今の彼女の顔は、酷く楽しそうな表情をしいいていた。

楽しい玩具を与えた子供のような、そんな無邪氣な笑みを。

「それじゃー小嶺君。今日の放課後尚江皓女子を捕まえるとしま

しょ

何気^{（）}に言つたそれは[冗談半分とは違い、そのままの意味なのだろ
う。]

深く溜息を吐いた。

これから先の展開が全く予想できないと、嘆くよう^{（）}。

ただ俺は深く深く溜息を吐いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9786o/>

坂本

2010年11月21日16時11分発行